

資料

小学生を対象とした Death Education の実践と評価

— 小学 2 年生の記述内容の前後比較より —

井上ひとみ 岡田洋子* 菅野予史季*

志賀加奈子* 荃津智子*² 井上由紀子*³

概要

【目的】子どもたちの「命や生きること」に対するイメージや感じ方に対し、Death Education を実施することがどのように影響するのかを明らかにする。【研究方法】対象：A 市内の小学 2 年生 78 名。教材：「ペットの死」をテーマとした創作絵本「ポチとルナはいつも一緒」の鑑賞。データ収集と分析：①授業中の観察記録の分析②「生きることや命」を課題に絵本鑑賞の前後でレポートを書き、前後の内容を比較する【結果と考察】鑑賞中、おしゃべりすることなく、約 10 分間集中して見ていた。実施前のレポート提出者は、78 名中 73 名、実施後は、76 名に増え、記述量も 1.3 倍に増加していた。また、内容は、知識・概念的なイメージから、他者への慈しみや思いやり、悲しみなどの感情的・情緒的記述に変化しており、低学年の子どもでは、ペットのような身近な教材を使用して、死や生を考える機会が必要であることが示唆された。

キーワード Death Education, 小学校低学年, ペットの死, 認知発達, 内容分析

1. はじめに

小児看護は、心身ともに健全な子どもの成長・発達を援助することを目指している。しかし、最近、青少年による生き物や人間に対する残虐な事件、いじめ、自殺が後を絶たない。子どもたちが、今、命や死をどのように考えているのか、また、私たちがどのように教えていったらよいか問われる。

現代の子どもたちは、身近な死の実体験に先行して、一方的にテレビやゲームを通した遠い死が、大量に繰り返し伝えられる。バーチャルな死が、日常生活に侵入する社会¹⁾に育つ学童期の子どもたちが、死をどのような「体験」として行動シエマ（ピアジェの認識発達）に取り込み学んでいるか、さらに死をタブー視し大人が子どもと会話を避ける傾向にある社会環境が、子どもの死生観の形成に及ぼす影響²⁾について関心をもちながら研究に取り組んできた。

私たちは、子どもの死の概念発達に関する先行研究^{3), 4)}をベースに、子どものアニミズムや死の概念発達と生活体験について、北海道・関東・九

州で調査を実施し、平成 13 年度科学研究成果報告書：基盤研究 (C) で報告した⁵⁾。対象は、小学校 1 年から中学校 3 年までの 2,700 名であった。その結果を 10 年前の調査⁶⁾と比較したところ、身近な人やペットとの死別体験は減少していないことがわかった。しかし、今まで家族と死について話したことの無い児童は、全体の 4 割以上、死についてなるべく話したくないと思っている児童は全体の 6 割であった。

死を語る事が避けられている社会では、小児期に親やきょうだいの死を経験した場合、家族の死を「自分の責任」ではないかと悩みながらもだれにも打ち明けることなく成人期に至り、再び身近な人の死が引き金となって問題を呈することがある⁷⁾。また、子どもの死因⁸⁾は、不慮の事故によるものに次いで、小児ガン特に白血病である。小児看護は、①子どもが誤った罪の意識⁹⁾(大事な人に死が自分の責任)にゆがめられることなく、②子どもたちに限りある命の尊さを伝え、③予後不良な疾患に対しても主体的に生きる援助¹⁰⁾を行うことにあると考える。そのためには、一人一人の子どもが、「生」だけではなく「死」も隠蔽することなく肯定的に伝えることにあると考える。

われわれは、平成 13 年～15 年度科学研究費助

* 旭川医科大学医学部看護学科

*² 天使大学看護栄養学部看護科*³ 日本赤十字北海道看護大学

成金基盤研究 C(2) (研究代表者 岡田洋子) の助成を受け、発達段階別に、Death Education の具体的な内容を検討し、小学校低学年、高学年、中学生用に、教材を作成し実施した。本稿では、小学校低学年に実施した Death Education について、報告する。

2. 目的

子どもに対する Death Education の具体的な方略を検討し、実施することによって、子どもの「命や生きること」と「死」に対する概念発達・イメージや感じ方にどのように影響するのかを明らかにする。

3. 研究方法

1) Death Education の具体的な方略の検討

私たちは、Death Education の具体的な方略を検討するために、絵本・教科書・「死の教育」実践に関する文献を集め、現在、子どもに対してどのような、情報があり、また、教育がされているかについて検討し、メンバー間で共有した。

その結果、絵本のほとんどは、「生命の誕生や尊さ」に重点が置かれ、「死」に焦点を当てたものは非常に少ないことがわかった。「死」をテーマとし、容易に手に入るものは、15冊程度あったが、ほとんどが、欧米の作品の訳本であった。その中で、「死」を直接扱った絵本は、Heegaard . M¹¹⁾ の「When Someone Very Special Dies」や Boulden . J¹²⁾ の「Saying Goodbye」、Brown LK, Brown . M¹³⁾ の「When Dinosaurs Die」など、10冊弱^{14) 15) 16) 17)} あった。一方、日本の作品では、菊田¹⁸⁾と数冊^{19) 20)} が「死」をテーマに扱っている程度であり、多くの絵本が、「命の誕生」に重点を置いていた。

アルフォンス・デーケン²¹⁾は、120冊の「死の準備教育」の文献を紹介し、欧米では、幼児教育・小学校教育から、Death Education が行われていることと、おこなうことの意味を述べている。そこで、日本の教科書では、Death Education がどのように盛り込まれているか、県内の小学校の1年から6年までの教科書内容を概観した。生活科や理科、道徳、保健（特に、性教育）など広範囲に渡って「生命」にかかわる内容が盛り込まれていた。小学校低学年では、アサガオを種から蒔き、花が咲いて散り、種が出来るとの観察やカブトムシを幼虫から育てることを通して、命の教育を行っていた^{22) 23) 24)}。また、「生まれてくるってすごい」(長野県下の小学校等)をテーマに、赤ちゃんの誕生を通して、生命のすばらしさを伝えていた。4年生では、自分が誕生した時の思い出の品

物(写真やへその緒)を集め、命名の由来などを家族に聞くことにより、レポートを作成し、「両親によって大切に育まれてきた私の命」を実感するような授業が組み込まれていた。しかし、「死」を直接取り上げる内容は、明記されていなかった。一方、「死」を直接テーマとして取り上げようとする試みは、アルフォンス・デーケンを中心とした「生と死を考える会」²³⁾や阪神淡路大震災を題材にして、兵庫・生と死を考える会(ビデオ教材「生と死の教育」研究会：英知大学人間学教室)の実践、また、自らのガンの体験を子どもたちに伝える種村²⁶⁾の「知りたがりやの子どもたち」の取り組みが若干報告されていた。また、いずれも、対象学年は、認知発達の段階としては、具体的操作段階の小学校4年生以上であった。

Death Education 実践者^{27) 28) 29) 30) 31) 32)}からは、一般には、「子どもには、楽しい体験や嬉しい体験をさせたほうが、優しく明るい子どもにそだつだろう。」という考え方が根強く、「死の教育は、未来のある子どもに、終わりを突きつけ、悲観的である」と信じられていること、しかし、死を語ることで、子どもたちが、死を否定的な側面で受け止め悲観的になるか否かは、伝える大人との相互作用によることとどう伝えるかによること。死が誰にとっても避けられないことである限り、その準備をすることは重要であり、限りある命の重みを考え、生きものの命を慈しむ心を育てる努力こそ重要であること。大人が思う以上に、子どもには、真摯で逞しい感性を伸ばす力があることなどが示唆されていた。

以上をふまえて、小児看護の立場から行う Death Education の方向性や意義について、メンバー間で話し合い、以下のような共通理解を図った。①学校教育の中で、「人の命」に関わる内容は、小学校の中学年(4年生)以上を対象としているようであった。しかし、欧米では、小児ガンの子どもに対する医師からの告知³³⁾(小児ではアセント)は、6~7歳頃からされている。実際、小児病棟において、大人が最大限の注意を払い昨夜亡くなった子どものことを隠していても、6歳ごろの子どもたちは、友だちの死に気づいていると思われる言動にしばしば遭遇する。したがって、Death Education の対象は、小学校低学年からとする。②看護の特色を生かした教材の作成には、「命」「生きること」に、「死」を含んだテーマや内容を積極的に取り入れる。③ピアジェの認知発達に基づき、小学校低学年は前操作段階³⁴⁾であ

り、言語を通して抽象概念を伝えることが困難な段階であると考え、絵本やビデオのような視聴覚教材を通して「命」についてのメッセージを送ること。

③Speece.M.W.,Brent, S. B³⁵⁾らが、死の構成要素としてあげている「死の不動性(食べる, 動く, 成長する, 心臓が動く, 考える, 話すなどの機能が失われる)・不可逆性・不可避性・普遍性」への子どもの理解の段階を考慮して評価方法を考える。

2) Death Education の実施と評価の方法

【日時】2003年9月9日(火) 11:40~

【実施場所】小学2年生の教室

【対象】小学2年生, 78人(2組. 欠席者2名)

【役割分担】2教室に各々3名の研究者を配置。

1名が研究の趣旨を説明し, 2名は用紙の配布および回収(実施前後に感想文を書く)。担任及び教育実習生が見守った。

【題材と選定理由】

ペットの死を題材とし, 創作絵本の題は, 「ポチとルナいつでも一緒」。5~9歳では, 死の不可逆性を認識するが, 自分の身や家族にも起こりうるという死の絶対性と普遍性は受け入れることが困難(マリヤ・ナギー³⁶⁾)である。子どもたちの多くは, 自分のペットが死んだときにはじめて死と対峙し, 児童期の半ばころ(8~9歳)までの子どもは, 近親者やペットの死により, 分離の不安, 悲しみ, 怒り, 不満などを強く体験する。以上のことから, 子ども達にとってできるだけ身近に思える存在であるペットを題材にすることが重要であると考えた。まず, Death Educationの導入として, 「死ぬってどういうこと」と言う投げかけをし, 「ポチとルナ」というフィクションの少女と犬の物語を題材に「命」「生きること」を考えることとした。

【授業の進め方】

Death Education に対し理解と協力のあった学校側と打ち合わせを重ねた結果, 道徳教育の一環として, 実施することとなった。具体的な進め方は, 以下の表1に示した。

【児童への説明事項】

①導入

2年生の皆さん, おはようございます。

はじめまして。私達は, 前は小児科の看護師でした。今は大学で, 看護師になるために勉強している学生さんを教えています。

表1 授業の進め方

進行	実施内容	参加者
11:40 開始 1. 導入 (10分) (各教室)	①自己紹介 ②研究の趣旨と授業の進め方の説明 ③用紙の配布 ④「命について思うこと」を書く	児童: 78名 (1組40人, 2組38人) 担任: 1組と2組で2名 教育実習生: 1名
2. 展開 (30分) (遊戯室)	⑤創作絵本「ルナとポチいつでも一緒」の鑑賞	研究者: 3名
3. まとめ (10分) (各教室)	⑥「命について思うこと」を書く	

病院では, 病気で亡くなっていく人がいます。そして, 同時に新しい生命(赤ちゃん)が生まれます。今日は皆さんと一緒に, 「命」について考えてみたいと思ってきました。後で部屋を移り「ルナという少女」と「ポチという犬」のお話しを見て頂きます。その前に「命について思うこと」を書いて下さい。用紙を配ります。テストではないですし, 書きたくない場合は, 書かなくても良いし, 書けなくても良いので, お友達との相談はしないで書いて下さい。

②展開

教室からプレイルームに, 2クラスの児童全員が移動。「これから『ルナという少女』と『ポチという犬』のお話をみてもらいます」(パワーポイントに入れた「ポチとルナはいつもいっしょ」の画面を映写, 事前に録音したナレーションを流し, 10分間見た。)

③まとめ

絵本(パワーポイント)の終了後, 各々の教室に戻り, 前と同様に, 児童に用紙を配布し, 書きたくない場合は, 無理に書かなくてもよいことを伝え, 10分間で「ルナとポチのお話を見て, 『命』について, 今, あなたが思うこと」を書いてもらい, 回収した。

【データ収集と分析】

(1)対象:

研究者による児童の授業に対する参加態度の観察記録と実施前後の「命や生きること」についての児童のレポート

(2)データ分析:

①観察記録の内容分析

実施前(導入)・実施中(展開)・実施後(まとめ)の子どもが授業に参加する態度や反応について担当者が比較し, 研究者メンバーに報告し, 子どもが授業に参加する態度や反応から授業の進め方や内容についてディスカッションし評価する。

②実施前後のレポートによる内容分析

「命や生きること」について、児童が絵本鑑賞の前後で記述したレポートについて、分節（意味をもつ一連の区切り）と文（1 センテンス）に区切り、その記述量、修飾語（副詞や形容詞）の量や変化（修飾語が肯定的な表現か否定的な表現かなど）を比較する。

③子どもの「命や生きること」と「死」に対する概念発達

Freud.A³⁷⁾ の子どもが死をマスターする能力の判定に必要な条件としてあげている①動くものと動かないもの（「生きているもの」:「生きていないもの」）や因果的な思考と Speece. M. W BrentS. B³⁸⁾ が死の概念形成の構成要素としてあげている①死の不動性②不可逆性③不可避性・普遍性の形成と死のイメージ・概念の取り入れや形成（同化）について、前後を比較する。

表2 絵本の内容

ルナはポチが大好き、一番の友達で、いつも一緒。しかしある朝ポチが動かなくなり、別れの日が突然やってきた。ルナは、ポチに声を掛けるが、ポチは目覚めることなく段々冷たくなっていく。ルナは悲しくて涙が止まらない。ポチに「痛くなかった」「怖くなかった」「今、どこにいるの」「とても会いたいよ」と語りかける。ポチは、「ルナちゃん、もう一緒に遊べないけれど、目を閉じてごらん、ずっとルナちゃんと一緒だよ」と言う。

【倫理的配慮】

- ①保護者には、学校を通して、研究の趣旨説明と協力依頼文書を渡し、承諾を得た。
- ②児童には、導入時に研究の趣旨、参加と中断の自由、学業成績等の評価には関係ないことを説明し承諾を得た。特に身近なあるいは大切な人の死に出会って間もない児童の有無といった個別的情况に対して(その場合は行なわない等)配慮した。

4. 結果

4-1. 観察された児童の態度と反応

【実施前】

レポート記述中、周囲の児童や、教育実習生、担任に相談する児童が多く見受けられた。また、早々と書き上げて机に伏している児童、時間ギリギリまで書いている児童、机の中に用紙を入れてしまった児童などがいた。

【鑑賞中】

おしゃべりもなく、皆、真剣に見ていた。犬の声がどこから出ているのか？不思議がっている児童の声も聞こえた。映像が終了後、児童から拍手が起こった。

【実施後】

事後の記述では、周囲の児童や担任・教育実習生に話しかけることもなく、集中して書いている児童が多かった。また、記述終了後、感想を語り合っている声が聞こえた。

4-2. 小学2年生のレポート

実施前後のレポートの全文は、前後が対比できる表として、添付した(表5)。

1) レポートの記載内容の変化

(1)レポート提出と実施前後の記述量の比較

実施前のレポートが書けたのは、78名中73名であったが、絵本鑑賞後は、さらに3名増え、76名が書いていた。実施前の全分節数は、合計143、実施後の全分節数は合計196で、前後の分節数を比較すると、実施後は1.3倍に増えていた。1名当たりの分節数は、実施前は、平均1.9。実施後は、平均2.5であり、前後の比較では、1.3倍に記述量が増えていた。

また、文の(センテンス)数は、前では111文、後では131文へと1.18倍に増えていた。

(2)前後のレポートの概念の順序の変化

実施前後のレポートに記述された文は以下のカテゴリーにまとめられた。(表3)

表3 実施前後のレポート(カテゴリー)

実施前(111文)	実施後(131文)	実施前後の概念の合計順位
①みんなの生きる大切な命(普遍性):47文,	①みんなの生きる大切な命(普遍性):52文	①みんなの生きる大切な命(普遍性):99文
②命を失う原因・守り方(因果関係):42文,	②命や死別への思い:41文	②命を失う原因・守り方(因果関係):64文
③命や死別への思い:8,	③命を失う原因・守り方(因果関係):22文	③命や死別への思い:49
④限りある命(死の不可避性・不可逆性):7文,	④死の不動性:9文	④限りある命(死の不可避性・不可逆性):14
⑤死への問い・死後のイメージなど:5文,	⑤死への問い・死後のイメージなど:8文	⑤死への問い・死後のイメージなど:13
⑥死の不動性:2文.	⑥限りある命(死の不可避性・不可逆性):7文	⑥死の不動性:11

実施前と実施後を比較すると、実施前後とも1

位と5位は同じであったが、前では、2位は命を失う原因と命の守り方が1位と同じくらい多く、後では、いのちや死別への思い(情緒的)が同様に多かった。前では2位だった命を失う原因と命の守り方は、3位ではあるが、22文で2桁であった。

【内容の説明・修飾語】

表4は、前後のレポートの記述の中でも一番多かった「大切ないのち」の中から抜粋した。

実施前では、「命の大切さの理由」についての記述はほとんどなかった。実施後には「自分の命は世界に一つしかないのよ」や「大好きな生き物が死んでしまうことはとても悲しいことだから」、「好きなペットがいたら人より小さいから」等「なぜ大切なのか」の理由の記述のある分節がみられるようになった。また、「とても」や「もっと」、「すごく」などの副詞や形容詞を使って「命の大切さ」を強調する修飾語の付加という表現の変化が見られるようになった。そのような変化は、実施前は、1分節で終わっていた文章が、2分節、3分節にわたって説明を付加した記述となり、文章のボリュームが増えていた。

表4 「命は大切」の記述の前後比較

実施前	実施後
<p>【文例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・命は一つしかないから一番の宝物 ・命は小さいけれどたいせつだね ・命は人や動物には必ずあるものなので一つ一つ大事にする ・命は神様から借りている大切なもの 	<p>【文例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ありとか少ない命は大切にしよう ・命は大きくても小さくても大切 ・命は生き物(虫・動物)植物にもついているから<u>とても</u>大事 ・命は一つしかないから<u>もっともっと</u>大切にしなければならんだな ・命は<u>ちゃんと</u>大切にしなければならぬ体の中の大切なもの ・<u>好きなペットがいたら人より小さいから</u><u>もっと</u>大切にしなければならぬ ・命は<u>すごく</u>大事なものであるから自分の命は自分で守らなきゃいけないんだよやくわかった ・<u>自分の命は世界に一つしかないのよ</u><u>きちんと</u>自分で管理する(自分の命を大切に) ・<u>大好きな生き物が死んでしまうことはとても悲しいことだから</u>、<u>もっと</u>大切にしようと思います。

2) 死の概念要素の理解

(1) 死の普遍性について

実施前後とも最も死の普遍性についての記述が多く、「命は大きくても小さくても」、「命は生き物(虫・動物)植物にもある」「命はみんな一つしかない」という内容であった。実施

前の記述は、47文(47/73名中=64.4%)、実施後の記録は52文(52/76名中=68.4%)であった。1名の児童は、1概念につき、ほぼ1文を記述していた。このように、死の普遍性について64%~68%の児童が理解していた。

(2) 死の不動性について

死の不動性についての記述は、実施前には2文、実施後は9文で、記述は、全体の中で最も少ない。内容は、実施前は、「命がないと何にもできない」「命が無くなったらもう友だちやお父さんお母さんに会えなくなる」の2文であった。しかし、実施後では、「命がなくなると動かなくなる」、「動物は冷たいと死んでいる」、「一緒におやつを食べられない」、「お散歩もできない」など9文があり、生命徴候としての死の不動性を具体的に表現していた。

(3) 不可逆性・不可避性

記述量の順位では、実施前6位、実施後4位であった。実施後では、「死はちょっとしたはずみで起こるかもしれない」、「99%良くて、1%悪ければ死ぬ可能性はある」、「僕も犬を飼っているからそういうことがあるかもしれません」など、命のはかなさが現実味を帯びた記述もみられた。

(4) 死の因果関係

実施前・後とも、死の因果関係を示す、命を失う原因と命の守り方についての記述は多かった(2位, 3位)。その内容は日ごろ学校や家庭で教えられている注意事項の「左右見て横断歩道を渡る」「道路や線路に飛び出さない」など交通事故と死の因果関係についての記述は多く、前後合わせて64文ある中で、26文(40.6%)を占めていた。さらに、「虫やハチに刺されたら死ぬ」「人と硬いところにぶつかったとき」「花火」「火遊び」などの他の事故を含めると記述の8~9割を占めていた。「ガンや病気」などの記述は、1文だけであった。

3) 死(命)のイメージ・概念の取り入れや形成

① 精神的な命の永続性

実施前には見られなかった死後の死者とのつながり、すなわち、精神的な命の永続性について表した記述が、実施後にみられるようになった。その内容は、「ポチとルナは命と命のアンテナがつながった」や「ポチは死んじゃったけれど、離れていても一緒ずっと友だち」、「ポチは死んじゃってもルナに会いたかったんだね」など低学年の児童は、素直にお話しを受け止め、共感していることが読み取れた。

②死のイメージの概念理解から情緒的理解へ
実施前では、「命や生きること(死)」としてのイメージは、死の普遍性(47文/111文)と因果関係(42文/111文)で80%(89文/111文)を占めていたが、実施後では、死の普遍性(52文/131文)と因果関係(22文/131文)で56.5%(74文/131文)になり、「死ぬってかわいそうだね」「もしそういうことがあったら寂しいだろうなと思った」などの死別の悲しみや死に逝くものへの哀悼など、個々の児童が感じた感情を表現している記述が多くなっていた。すなわち、命や死の普遍性や因果関係といった、知識・概念的なイメージに、他者への慈しみや思いやり、悲しみなどの感情的・情緒的深みが付加されていた。

③授業を受けた児童の中の何人かが、「僕も犬を飼っているからそういうこと(死)があるかもしれません」、「ペットも自分なりにお世話をしあげろ」など、自分が飼っているペットの命を気遣い大切にしようという気持ちの芽生えや、ペットの死への予期的な学習の機会になっていた。

また、「自分の犬が死んでしまったけれど、ずっと心の中にいると思う」「ぼくの犬はこころのなかにずっといる」など、以前飼っていたペットとの死別体験に対する記述が読み取れ、授業を通して、ペットの死を自分の心の中に肯定的に位置づける機会となったことが推量された。

5. 考 察

1) 授業の進め方および教材の評価

事業実施前に、レポートを課した時は、私語や実習生や担任に質問する様子が見られた。しかし、写した創作絵本の絵本鑑賞中は、私語もなく集中して見ていた。これは、小学校低学年の集中力が10分程度考えての内容としたことが効を奏したこと、また、鑑賞終了時に拍手が起こり、実施前には、レポートを書かなかった3名の児童が実施後には、記述するようになったことなどにより、一連の教材の使い方は、子どもの発達に適していたものと評価した。しかし、今回は、研究者と児童との間に、質疑応答などの時間を持たなかった。

「命ってどこにあるんだろう」、「どうしていつか死んじゃうの」、「ポチはどこでしゃべっているの」、「目をつぶるとなぜ一緒になれるの」など、絵本鑑賞によって出てきた児童の疑問に応じることや子どもの感情を受け止めることができなかった。死や命について一緒に考える時間を共有できる授業計画を考えることが今後の課題と思われる。

2) 小学2年生の死の理解とその特徴

実施前のレポート内容で、いのちの大切さ(普遍性)に次いで、記述が多かったのが、命を失う原因・守り方(因果関係)であった。Freud.A³⁷⁾の子どもが死をマスターする能力として、死の因果関係をあげているが、レポートから、小学校2年頃には、どんな原因でいのちを失うかを結びつけて考えられることが解った。日常的に、家庭や学校で注意されている危険なことの防止であり、危険なことと死との因果関係を理解する段階にある。しかし、病気や加齢による死という記述や現実に身近な出来事による身近な人の死の記述はなかった。実施後になると、死の原因(例えば、交通事故)の記述は前の半分(22)に減り、それに替わって、「死や死別への思い」が占め、漠然とした死の記述ではなく、大事な対象が死んだことと実感したような感情として、「別れることの寂しさ」やいのちのはかなさを記述するようになる。また、そのような記述から「ポチは死んじゃったけれど、離れていても一緒ずっと友だち」というように、与えられたストーリーをそのままストレートに受け止め、感情移入し同化していた。それゆえに、低学年には、伝え方や伝える内容をさらに慎重に吟味する必要性が示唆された。

3) 小学生における Death Education

1 回限りの試みで、教育の評価はできないが、絵本の鑑賞を通して、命の不可避性や不可逆性が記述され、命の大切さを実感する機会になっていたこと、「死んでしまった人の友だちやお母さんたちは生きていた中で一番悲しいんだな」と思いました」など絵本を通して死別の悲しみを擬似体験し、他人の悲しみを共感することもできるようになることなどが読み取れた。また、ペットと自分の死別について「僕も犬を飼っているからそういうこと(死)があるかもしれません」「ぼくの犬はこころのなかにずっといる」などの記述から、児童なりに、死別は避けられなくても心の中に大切な対象とのつながりの永続性を感じ、死についても見つめる力が感じられた。

しかし、現状では、子どもへの Death Education が、個々の努力によって行われるのみで系統的には教育現場でも進んでいかない。その理由を村井³⁹⁾は、一つは大人や教師が、「死」は知の対象ではなく、「死について考えても仕方がない」と考えているからであること、2つ目に大人や教師の内面にも死に対する恐怖があり、死について語りたがらない、語ろうとしない「死のタブー」が形成さ

れているからであると指摘する。上菌⁴⁰⁾が行った調査でも、ペットとの死別体験は7割を超えるが、死に関わる質問をしたことがあると答えているものは1割前後であると報告しており、経験していてもそのことを語りあう、尋ねる経験は少なく死について子どもが尋ねにくい、タブー視されていることが影響していると指摘する。

青少年の残酷な事件が後を絶たない現状があるが、一方、生きてくても生きることができなかった子どもたちを臨床で看取ってきた著者らにとって、子どもたちが命をいたずらに失うことに何らかの対処をすることが、課題である。今後は、低学年にも、病気や人の死も視野に入れて、検討していきたい。

謝辞

本研究にあたり、ご協力頂きました小学校の教員の皆様、一緒に真剣に取り組んでくれた子どもたち一人一人に心から感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 富田和巳：社会面から見た子どもの死の現状、小児看護, 21(11), 1497-1500, 1998.
- 2) Castro D: La Mort Pour de Faux et La Mort Pore de Vrai, Alban Michel, 2000.金塚貞文訳：あなたは、子どもに「死」を教えられますか？40-43, 作品社, 2002.
- 3) 岡田洋子；児童期における死の概念発達, 聖路加看護大学紀要, 6号, 31-41, 1978.
- 4) 佐藤比登美：現代の子どもの死の意識に関する研究, 小児保健研究, 58(4), 515-526, 1999.
- 5) 岡田洋子他：子どもの「アニミズム・死の概念発達」と生活体験—Death Education の方略を求めて—, 平成10~12年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書, 2001.
- 6) 岡田洋子：学童期にある小児の死の概念発達に関わる要因の検討, 天使女子短期大学紀要, 11, 21-36, 1990.
- 7) Freud.S: Mourning and Melancholia,S.E,14,1917.
- 8) 厚生省の指標「国民衛生の動向」, 68-69, 2004.
- 9) Melanie. K :Mourning and its Relation to Manic-Depressive States :Love, Guilt, and Reparation, and Other Work (1940) :小此木啓吾訳メラニー・クライン著作集3愛, 罪そして償い, 123-155,誠信書房, 1983.
- 10) K Kubler-Ross.E:A Letter to a child with Cancer, Arrangement, 1979.
- 11) Heegaard M: When Someone Very Special Dies,1988. 清水恵美子訳：「さよなら」を大切な人というんだ, 法蔵館, 2001.
- 12) 峰あずさ訳：「死」って、なに？—かんがえよう, 命のたいせつさ—, 文溪堂, 1998.
- 13) Bouliden J: Saying Goodbye, 1992. きたやまあきお訳：「さよなら」っていわせて, 大修館書店, 1997.
- 14) Brown LK,Brown M: When Dinosaurs Die, 1996.
- 15) 平野京卿訳：子どもに居るのおじいちゃん?, 偕成社, 1999.
- 16) みらいなな訳：葉っぱのフレディ, 童話屋, 1999.
- 17) 小川仁央訳：わすれられないおくりもの, 評論社, 1984.
- 18) 菊田まりこ：いつでも会える, 学研, 1998.
- 19) 大塚敦子:さよならエルマおばさん, 小学館, 2000.
- 20) 葉祥明：もう一度会える, 大和書房, 2001.
- 21) アルフォンス・デーケン他：死への準備教育のための120冊, ASMA SHOBO, 1993.
- 22) 工藤隆継：生と死をどう扱うか, 初等科理科教育, 30, 32-35, 1986.
- 23) 木谷要治：理科教育における生命観教育の重要性, 理科の教育, 36, 9-14, 1987.
- 24) 多田納道子：児童の生命観の発達に関する研究, 生物教育, 32, 253-261, 1992
- 25) 生と死を考える会編：「生と死」を学ぶ, 春秋社, 1997
- 26) 種村エイ子：「死」を学ぶ子どもたち, 教育史料出版会, 2000.
- 27) 金光一彦：『命』と向き合うことは, 現代のエスプリ, 349, 58-67, 2000.
- 28) 近藤卓：命の教育, 思春期学, 21(1), 65-69, 2003.
- 29) 西本義之：「死」を考える学習, 現代のエスプリ, 349, 48-57, 2000.
- 30) 日下義明：「死の教育」の試み, 現代のエスプリ, 349, 39-47, 2000.
- 31) 兵庫県教育委員会：心の教育の充実に向けて—心の教育緊急会議のまとめ, 日本子ども資料年鑑, 6, 474,1998.
- 32) 座談会：生と死から学ぶ命の教育, 現代のエスプリ, 349, 5-38, 2000.
- 33) 細谷亮太：小児の死—ケアとエデュケーション—, 思春期学, 21(1), 61-64, 2003.
- 34) Piaget. J(大伴茂訳, 児童の世界観, 289-360, 岡本書院, 1926.
- 35) Speece.M.W.,Brent, S. B: Children's Understanding of Death:A Review of Three Components of a Death

Concept. Child Development,55(5),1671-1677,1984
 36) Nagy M: The child's view of the death. Meaning of Death. Feifel, H. Ed. Megraw-Hill, 1986
 37) 小嶋謙四郎;小児看護心理学, 10, 医学書院, 19782.
 38) 35) 前掲
 39) 村井淳志, 金森俊朗, 村井淳志: III命の授業をつ

くる, 性の授業 死の授業, 198-199, 教育史料出版会, 1996.

40) 上菌恒太郎: 子どもの死の意識と経験, 長崎大学教育学部教育科学研究報告, 51, 15-25, 1996.

(受付: 2005年3月31日, 受理: 2005年7月7日)

表4 小学2年生: 実施前後の概念別文

カテゴリー	実施前の文 (111文)	実施後の文 (139文)
1. みんなの生きる大切な命 (普遍性)	<p>計: 47文</p> <p>◎命は(一つしかないから) 大切 (32文)</p> <p>命は小さいけれどたいせつだね</p> <p>命の時計を大事にする</p> <p>命は人や動物には必ずあるものなので一つ一つ大事にする</p> <p>命は人間だけではなく、動物にも魚にもある</p> <p>家族みんな命をもっているね</p> <p>鳥も魚も木も命がないと生きていけない</p> <p>みんなの生きる命</p> <p>みんなみんな生きています。</p> <p>命は大きなくても小さくても同じ</p> <p>命があると長生きできるかもしれない</p> <p>神様からかりている大切なもの</p> <p>命はみんな一つしかないから守ろう</p> <p>命は一つしかないから自分の命は自分で守ろう</p> <p>大きなくても小さくても命は一つだから自分でまもらなければ生きていけない</p> <p>だれだって命は一つしかないからいのちはまもらなきゃ</p>	<p>計: 52</p> <p>◎命はすごく大切なものなんだ (39文)</p> <p>ありとか少ない命は大切にしよう</p> <p>命は大きなくても小さくても大切</p> <p>命は生き物(虫・動物)植物にもついているからとても大事</p> <p>動物だって命をもっている</p> <p>小さいものでもみんなと同じ命をもっていると思いました</p> <p>命は一つしかないからもっともっと大切にしなければならいんだな</p> <p>命はちゃんと大切にしなければならい体の中の大切なもの</p> <p>好きなペットがいたら人より小さいからもっと大切にしなければならい</p> <p>命はすごく大事なものだから自分の命は自分で守らなきゃいけないんだとようやくわかった</p> <p>自分の命は世界に一つしかないのだからちゃんと自分で管理する(自分の命を大切に)</p> <p>大好きな生き物が死んでしまうことはとても悲しいことだから、もっと大切にしようと思います。命は大きなくても小さくても大事な命</p> <p>命は生き物(虫・動物)植物にもついているからとても大事</p> <p>命は一つしかないからもっともっと大切にしなければならいんだなあ</p> <p>自分も命の大切の仕方がわかってきた</p>
2. 命を失う原因・命の守り方(死の因果関係)	<p>計: 42</p> <p>ガンや病気にかかったとき</p> <p>虫やハチに刺されたとき死んでしまう</p> <p>けがをしても命にかかわる</p> <p>ひとと、堅いところに頭をぶつけること</p> <p>生まれたとき病気にかかって死んだら大変</p> <p>人と硬いところにぶつかったとき</p> <p>長く息をしなかったら死ぬ</p> <p>車にひかれそうになったとき</p> <p>交通事故にあわないようにする</p> <p>車に惹かれないようにする</p> <p>車に乗っている人は見えないかもしれないので見るようにする</p> <p>横断歩道を渡るときは左右をよく見てそして手を挙げて渡ります</p> <p>ちゃんと赤だったら渡らないで、青になってから渡るようにする</p> <p>横断歩道を渡るときは青になってから渡る(2)</p> <p>左右ちゃんとみて横断歩道を渡る</p> <p>ちゃんと止まるの標識があったら左右をちゃんとする</p> <p>一時停止のときはちゃんと左右みて渡る</p> <p>道路や線路に飛び出さない</p> <p>止まっている車の前を通る</p>	<p>計: 22</p> <p>命の不思議なパワーが無くなると死ぬんだ</p> <p>校辻子で死にたくない</p> <p>車が止まっているところを通らない</p> <p>体に火がついて死んでしまうことがあります</p> <p>灰を吸って死んでしまうことがあります</p> <p>命はケガでもなくなる</p> <p>車に轢かれて死んじゃった人がいるから自分も気をつけよう</p> <p>左右をちゃんと見て横断歩道を歩く</p> <p>信号も無い道に飛び出さず、左右をよく見て道路を渡る</p> <p>自転車は出来るだけ小回りの聴くものを使う</p> <p>自転車に気をつける</p> <p>危ないものはお父さんお母さんと使う</p> <p>体に悪いものを食べない</p> <p>体調に合わせて行動する</p> <p>信号も無い道路に飛び出さず、左右をよく見て道路</p> <p>車が留まっているところを通らない</p> <p>線路に石を投げない</p> <p>線路に飛び出さない</p> <p>自転車に気をつける</p> <p>体に悪いものを食べない</p> <p>体調に合わせて行動する</p> <p>危ないものはお父さんお母さんと一緒に使う</p>

	<p>車道に上がらない 自転車は小回りの聴くものに乗る 自転車とぶつからないように あまり不注意をしないようにしないといけません 道路や線路に飛び出さない 変えるときは油断しちゃだめだ 危ないことをしない 危ないものを使うときはお父さんやお母さんと一緒に使う 火遊びをしない 子どもだけで花火をしない 手のひらの半分が火傷したら病院に行く 動物にかまれたり、ひっかかれたらすぐ応急手当てを死に病院へ行く けがをしないように (2) 階段から落ちない骨を折る 火事になりたくない タバコを吸わない ゴミを分けて捨てる ふざけない すごく小さい紙を切らない スポーツに夢中にならない 命は傷つけない 体に気をつけて食べ物を食べる</p>	
<p>3 命や死別への思い</p>	<p>計：8 生きる力が無くなってしまった人は辛いと思う 亡くなってしまった人はとってもかわいそう 事故で亡くなった人はかわいそう 動物を飼っていて死んだら悲しい 命はあっという間に無くなると残念だな 命を失うとみんなを悲しませる原因になる 子どもが死んだら両親がとってもかわいそうです 長生きできればいいな</p>	<p>計：41 死にかわいそうだね 命を亡くすと悲しいね 生き物が死んでしまったらかわいそう 誕生日にもらった親友のポチが死んでルナはかわいそう 命が無いと他の人が悲しくなる 犬が死んだら心がなくなって人間が悲しんでかわいそう 動物が死んでも人間が死んでも悲しい 遊んでいて死んだらもっとかわいそう お墓に入れたとキルナはすごく悲しかった もしそうゆうことがあったら寂しいだろうな 小さい命でも命が無くなるとかわいそうに思いました 犬や動物は人より生まれる時間が短いから、いっぱいかわいがないと、と思う・ ペットも自分なりにお世話してあげる 好きなペットがいたら人より小さいからもっと大切にしなければならぬ もし死んでしまったらうちのお庭にお墓を作って埋めてあげたいです 死んでしまったけれど、仲良しなのでルナは忘れられなかった ポチは死んじゃっても、ルナに会いたかったんだね 死んでしまった人は生き返りたくても死んでしまったから生き返れないのですごくかわいそう 一番仲良くしている人、生き物が死んでしまったら悲しいね 死んでしまった人の友だちやお母さんたちは生きていた中で・一番悲しいんだなと思いました 死んでしまったら悲しいけれどお墓に入ってしまったらもっと悲しいな 最初は楽しそうだったです ずっと一緒だったのに別れるって辛いね ポチは死んじゃったけれど心にはずっと生きているんだなと思いました</p>

		<p>命というものは亡くなくてもあたたかいということを学びました ポチとルナは心のアンテナが繋がっているのだなと思いました ポチとルナはなかよしだったけど、さよならの時が来てしまったね 一緒に遊べないけれど、目を閉じればまた会えるから、寂しくも悲しくも無い 死んでしまったら目には見えないけれど近くにいるんだね 誰が死んでも心の中にいるんだと思った 自分の犬は死んでしまったけれど、ずっと心の中にいると思う ぼくの犬は心の中にずっといる 死んだら一生会えないけれど私のそばに死んでしまったゲンタがきつとそばにいてくれると思います 犬のポチは目をつぶれば一緒といわれたことで新たな一歩を踏み出したと思う 命はどうしても一つしかないのかなもっと一杯あればいいのに 突然ポチが死んでしまうところが心に残った 命ってすてきだ、 感動した 死んで生き返ったら命が繋がった 犬と遊べてよかったね プレゼントで犬をもらってよかったね 犬を飼っているその犬の命とルナさんの命があるから遊べるね</p>
<p>4. 限りある命・死 (死の不可逆性)</p>	<p>計：7 命は一つしかないからそれが無くなると死んでしまう 命は世界みんな、動物も一人一つ たとえ赤ちゃんでも命が無くなったら一貫の終わり 赤ちゃんが生まれても死んだ人は返ってこない 命は絶対交換とかできない 命を無くさないようにしていないと、すぐ、命が無くなってしまう</p>	<p>計7 やっぱり、命は一つしかないんだ 死はちょっとした弾みで起こるかもしれない 99%良くて、1%悪ければ死ぬ可能性はある 命はパツと無くなる 僕も犬を飼っているからそういうことがあるかもしれませんが 命は死んだらもう二度と返ってこない 気をつけないと死んでしまうかもしれません</p>
<p>5. 問い・死後のイメージなど</p>	<p>計：5 どうして人間は死んじゃうのですか どうして命は一つしかないのですか 人間は、病気でも死んじゃうことがあるんですか 命は一つしかないから生き返らないけど神様になって人間は生きる 命がなくなったら拝んでから焼いてお骨にされちゃう</p>	<p>計8 命ってどこにあるんだろう どうしていつか死んじゃうの ポチはどこでしゃべっているの 目をつぶるとなぜ一緒になれるの どうして命は一つしかないのもっと一杯あればいいのに 死んでしまった犬のお友だちやお父さんは生きていました 生きている人もしんでいるひともいるんだね 命が無くなっちゃた人でも天国で生きている</p>
<p>6. 死の不動性</p>	<p>計：2 命が無くなったらもう友だちやお父さんお母さんに会えなくなる 命がないとなにもできない</p>	<p>計：9 命がなくなると動かなくなる 動物は体が冷たいと死んでいる 命が無くなると何もできなくなると思いました 命のパワーが無くなると死ぬんだ しんだらなにもできない 命が無くなったら誰とも遊べない 死んだらお友だちと一緒に遊べない 一緒におやつを食べられない お散歩もできない</p>

A Study on the Education of Elementary School Children on the Subjects of Death and Dying—A Comparative Analysis of Reports by Children

Hitomi INOUE, Yoko OKADA, Yoshiki SUGANO, Kanako SHIGA,
Tomoko KUKITSU, Yukiko INOUE

Abstract

The purpose of this study is to evaluate the influence of education related to death and dying on children's concepts of "life" and "living". The subjects were 78 children, all 2nd graders from elementary schools. The teaching material was taken from a picture book about the death of a pet, which children were instructed to study uninterrupted for 10 minutes. Subsequently they were instructed to write reports on "life" and "living" before and after the procedure. These reports were then compared and analyzed.

Results and Discussion: Of the 78 children, 73 and 76 submitted a report before and after the procedure, respectively. The number of sentences in the reports increased by 1.3 times (from 143 before to 196 after). The teaching material used in this study was familiar to the subjects because the death of a pet is a common experience for school children. The study suggests that there is a need to continue to discuss, evaluate and use materials familiar to young children to afford them opportunities to talk about life and death.

Keywords teaching on death and dying, lower grade elementary school children, death of a pet, cognition development, content analysis